

連続セミナー
だから“日中韓”一絆の再発見
第9回「プロフェッショナルが拓く日中韓の未来」

2017年2月21日、国際文化会館岩崎小彌太記念ホールで連続セミナー「だから“日中韓”一絆の再発見」の第9回セミナーを開催しました。本連続セミナーの最終回となる今回は、「プロフェッショナルが拓く日中韓の未来」と題し、「中国で活躍する日本人」として俳優の矢野浩二さん、「日本で活躍する韓国人」としてSunny's Trading 代表理事の盧聖姫（ノ・ソンヒ）さん、「韓国で活躍する中国人」として社団法人韓中芸術協会理事長の彭麗穎（ポン・リーイン）さんをスピーカーに招き、約90名にご参加いただきました。

石川好さんのモデレーターにより座談会形式で行った今回のセミナーは、3人のスピーカーからそれぞれの国で活動するにあたっての困難や新しい発見などを伺いながら、「人が拓く日中韓の未来」を探る時間となりました。

異文化の中に入る

石川 芸能界、ビジネス界、音楽界とそれぞれ違う分野で活躍していますが、自分の国を離れることを決心したきっかけはどのようなものでしたか。

矢野 15年間中国で俳優活動をやってきましたが、中国に行く前は、俳優修行として付き人をしていて、役者として成長できる機会にまだ恵まれていませんでした。その時、中国から連続ドラマのオファーを受けたのがきっかけです。オファーを受けた2000年当時は、中国についての知識も全くなく、ある意味白紙状態でしたが、これが中国という異文化に入る形としては良かったかもしれません。17年前の中国は今よりもさらに原始的な手法で撮影をしていたりと、日本にはないその風景を面白く感じ、ここでやっていきたいと思えました。

盧 韓国で日本語の通訳の仕事をしていましたが、平成3年の沖縄とソウル間の直行便開通にあたり通訳に携わったのを縁に、沖縄でも仕事をするようになりました。そして、英語の通訳の仕事をしていた主人と出会い、結婚し、沖縄でビジネスをスタートさせることになりました。現在は、不動産業と建築業、ホテル業を営みながら、韓国の経済にも、移住した国にも役に立つ活動をしようと36年前に海外にいる韓国人起業家・経済人のネットワーク組織として設立されたOKTA（Overseas Korean Trading Association）の東京支会の会長も務めています。

彭 最初は留学生として韓国の大学院に進学しました。4歳から箏という中国の伝統楽器を学んできましたが、最初は両親に強制されてやっていました。しかし、学べば学ぶほど伝統楽器に興味を持つようになり、中国以外のアジアの国にも箏に似た管楽器があるのを知り、大学を卒業したらどこかに留学したいと思っていました。留学先として韓国を選んだ理由は3つあります。まず、私の出身地である山東省は、孔子の出身地でもあります。宋時代にあった孔子の理念を示した音楽が韓国では継承されているのに、中国では断絶されてしまっています。韓国でその音楽を学んで中国で復活させたいと思ったのです。二つ目は、箏には9つの流派がありますが、朝鮮族といわれる朝鮮系の民族も独自の流派を形成していて、その音楽は朝鮮族の人しかできません。その朝鮮族流派の音楽を、漢民族として初めて学びたいと思ったからです。最後に、韓国、中国、朝鮮族がそれぞれ箏に似た管楽器を使って育んできた伝統音楽の違いも学べるということが韓国を選んだ理由です

そして、現在は韓国で生活していくうちに、韓国と中国の民間の芸術交流が少ないことに気づき、韓中芸術協会を設立し、音楽等による文化交流、中国語講座、楽器をベースにした貿易等の活動もしています。

異文化の中の自分

石川 日本でもよく知られている孔子は、音楽を大事にしていたそうですが、その孔子にかかわる音楽が中国ではなく、韓国で継承されていて、それを勉強するために中国人が韓国に行ったという今の話から、歴史的なつながりの不思議さを感じます。

ところで、矢野さんと、盧さんは、それぞれ役者として、企業家としてぶつかった異文化の壁はありませんでしたか。

矢野 中国のドラマや映画は歴史作品が多いのですが、歴史作品だと、日本人が演じられるのは軍人や兵士の役だけですし、すべて悪役です。残虐なシーンも多かったのですが、2002年から2006年頃までは、任された役を全力でやろうと頑張っていました。

中国の戦後50周年だった2005年には、それを記念する作品に多数出演することができました。それらの放送を受け顔が知られるようになったことで達成感を覚えました。同時に不安を感じるようになりました。役者としては、ずっと同じ役をやっているのはだめなのですが、実際目の前にある仕事は、残虐な、極悪非道な日本人という同じようなキャラクターの役ばかりで、なんの新鮮味もありません。しかし、生活のためにはそのような役を引き受けるしかない。これでよいのかと、葛藤が生まれたのです。

盧 今回のセミナーの話を受け、日本に来た当時のことを振り返りながら気づくことが幾つもありました。

まず、私自身は、韓国で通訳の仕事をしていたので、日本人と話す機会も多く、日本で暮らすには問題ないと自信がありました。しかし、実際日本に来てみると違ったのです。韓国では誰よりも日本語ができる人だったのに、日本では誰よりも下手。キャリアウーマンとして働いていた自分自身に自信をなくしてしまったのです。

また、韓国ではいつも目標に向かって頑張っていた自分が、日本に来て 2 ヶ月で子供ができ、すぐ二人目の子供も生まれ、これまでの自分とは全く違う日常を送ることになりました。しかも、周りの人たちは、私のことをノ・ソンヒと呼んでくれず、「OO の奥さん」、「OO のお母さん」と呼ぶ。こうした状況のなかで、アイデンティティが失われてしまったと思うようになりました。

そして、本能的な問題ともいえると思いますが、夫は当時住宅の斡旋などの不動産業をやっていて資産もそれほどない状態でしたが、酒好きで毎晩遅く帰宅していました。夫に何かあったら、2 人目の子を妊娠し、小さな上の子供を抱えている自分はバイトもできないだろうし、夫の会社の従業員も辞めてしまうだろうしと、マタニティブルーも重なり、生活や子供に対する責任感を異常に感じていました。

石川 日本では結婚した女性を「OO さんの奥さん」というけど、外国から来た人にはある意味アイデンティティ・クライシスだったでしょう。また、日本語に自信があったのに、日本に来たとたん下手と感じたというのは、自分のアイデンティティが崩れていくことと同義だと思います。彭さんはどうでしたか。中国で忘れ去られた音楽が韓国に残っていたとの話がありましたが、それを韓国の方はどう思ったのでしょうか。

彭 韓国語が話せない状態での留学でしたので、まずは色々工夫しながら韓国語を覚えることから始めました。中国の楽器を伝えたいと思っても、韓国語が話せないとそれを伝えることもできないからです。箏を「中国のガヤグムです」と紹介したりと、韓国語で話すことができるようになってからは、中国の楽器や音楽等を理解してもらえるようになりました。でも、中国で忘れられた音楽が韓国で継承されているのでそれを勉強しているという、韓国の方は「それはいいことだ」と誇らしく言うので、その話を聞くと落ち込むこともありました。

違いを乗り越える

石川 近隣国同士だと、ある国で忘れ去られた文化が隣の国には残っているということもあるでしょうし、それは別の意味での異文化かもしれません。先ほど盧さんより自分のアイデンティティが分からなくなったと話がありましたが、どうやってそれを乗り越えたのでしょうか。

盧 病院にも通いながらもあまり回復できずに入る時、東京等から専門家を招いたカウンセラー養成学校ができるとの話を聞いて、そこで勉強してみたいと思いました。その学校で3年間、先生の協力を得ながら自分を掘り下げて考える時間を持てたのがきっかけだったと思います。現状に対する自分の言い訳や見栄と向かい合っていくことはきついものでしたが、ある日、本当の自分が見えてきたと感じたのです。ちっぽけで何でもない自分がいるようで1週間ぐらい泣き続けましたが、逆にこんなに弱いのに今までよく頑張ってきたなど自分を認めるようになると、再びゼロから始める勇気が出てきたのです。

日本では家族や子供のために自分の人生を捧げるお母さんというのがありますが、それもとても大事ですが、私は自分としての生き方もしたかった。そこで、日本語と韓国語が話せるので日韓の文化や歴史を伝えるボランティア活動を行ったり、地元のコミュニティークラブにも参加し地域の人たちのための活動を行ったりして、積極的に異文化の中に自分を入れていきました。ある意味ここで骨を埋めていくのだとの思いを強めていくしかなかったかも知れません。

石川 矢野さんからは、同じ役ばかり演じていて自分の中で葛藤が生まれたとの話がありました。そうした現状の転機となったのは何でしたか。

矢野 日本兵のような役のおファーは多くありましたが、まず断ることにしました。それは、友人の中国人の監督が、「自分がやりたい役だけやればいいんだ」といつてくれたからです。中国人の友達がそう言ってくれるとは思いませんでしたので、決心がついたのです。また事務所も、やっと稼げるようになった時期に断るなんて言語道断と思って当然なのに、当時のスタッフらは私の考えを尊重してくれました。

その後、半年ぐらいあまりおファーのない状態が続きましたが、ある時出演した中国のトーク番組が好評となり、その後バラエティ番組からのおファーが続いたのです。特に中国のバラエティ番組は後半になると恒例のように、「浩二、日本のアニメソングを歌ってくれよ」と言うのですが、私がそれに応じて歌うとみんな喜んでくれました。それを見てもっと喜ばせたいと思うようにもなりました。

中国の視聴者には、ドラマの中では怖い軍人なのにバラエティでは面白い、このギャップが受けたのではないのでしょうか。こうした番組に出ることでイメージチェンジに成功したといえるでしょうか、その後は、人間味のある役であったり、コメディの役であったり、役の幅が広がりました。

石川 矢野さんより転機についての話がありましたが、盧さんにとって再び自分自身に自信のついた転機とは何だったのでしょうか。

盧 先ほど話しましたように、プライベートでは自分自身と向き合うことから始めました。そして仕事の方では、まず従業員に信頼してもらおう努力しながら、企業家として、日本的な考え方に切り替えて、日本のお客さんは何を必要とするのかも考えました。

そうしている中で、何もない土地にホテル開発を成功させたのですが、それが最も自信のついた出来事だったと思います。ホテルの建設を進めるうえで、会社が持っている建築のノウハウを地域の建築家と共有する一方で、沖縄一のダイビングスポットとして開発し多くの人に来てもらいたいと地域の方々に提案し、一緒に珊瑚の種をまく等地域住民からの協力も得ることができました。ひとりではなくて、地域の人と絆を作りながら一緒にやり遂げたことが、自分自身の成長と自信につながったと思います。

石川 ひとりではなく、一緒にやっていくことが大事という話は、日中韓の関係でも同じことが言えるのではないのでしょうか。今、日中韓三国の関係がよいとはいえないのは、目標に向かって協働でやっていることが少ないからかもしれません。

では、彭さんは、韓国で芸術活動を通じて中韓、日中韓の協働を試みっていますが、その協働作業が自分の力でできると思った出来事とは何だったのでしょうか。また、中国政府からの支援はどうでしたか。

彭 来韓した当時、韓国に中国との文化交流を行う団体がないことから、私の武器でもある楽器、そして音楽を日中の相互理解のために活用したいとの思いで、韓中芸術協会を作りました。協会を設立した時は、中国の箏がどういうものなのか、多くの韓国の方は知りませんでした。そこでまずは、箏のこと、そして中国のことを知ってもらおうと、箏が学べる音楽教室と中国語教室を開き3年間無料で授業を行ったり、箏を無料で貸し出したり、イベントの出演依頼も無料で引き受けたりしました。最初は年配の女性を中心に教室に参加する方が出始めましたので、「楽器を弾くと、指や頭を使うので認知症になりにくい」と説明する等ずっと関心を持って続けていただきたくための工夫もしました。そのお陰で生徒も30名までに増え、音楽、文化を通じて交流していけると思ったのです。

こうした活動を始めた最初の頃は、楽器を使った日中韓の文化交流についての中国政府の関心はあまりありませんでした。まずは、一人で公演を行ったり、私の趣旨に共感する日本と韓国の音楽家とアンサンブルを結成し公演を行ったりしました。また、中国や韓国、日本だけでなく、アジアにも視野を広げてモンゴル、タイ、ベトナムの方々とも共同作業をやったりと、知ってもらうための様々な企画を試みました。そうしていくうちに、色んな方に認めてもらえるようになり、習近平国家主席の訪韓時の晩餐会でも演奏することができました。その後は、中国大使館で開催する文化イベントで演奏したり、公的なイベントの企画を任されたり、日中韓関係の行事にも日本、韓国の音楽家と伝統楽器のアンサンブル公演を行ったりと、活動の幅を広げています。

石川 現在日中韓それぞれの国で活躍されている三人のスピーカーとも、困難に直面しましたし、それを乗り越える上で何か転機がありました。しかし、その転機をうまくつかめるために努力をされ、それを一層高めていった。成功は、転機をただ待つだけでは自分のものになんかすることができず、本人の努力によって訪れた転機をうまくつかめるかどうかにかかっていることを、3人の話を聞きながら改めて思いました。では、会場の皆さんからの質問をお受けしましょう。

身近なところからはじまる“日中韓”

質問 2015年のあるテレビ番組に出演した矢野さんが、「与えられた仕事をとにかく一生懸命頑張る。そして日中両国の間にいろいろあるけど、それを冷静に見ることが大事だと思う」と話していたのが印象的でした。しかし一方で、日中関係を冷静に見ることがなかなかできない方々がいます。どうすれば日中韓が仲良くやっていけるのか、矢野さんの考えを伺いたいです。

矢野 中国で役者として仕事をしてきましたが、私自身は、日本人という感覚を持ってスタッフに接し、仕事をしていただけではありません。中国のスタッフ等周りに対しても、中国人という目で見ずに、一人ひとりの個人として見ていました。それは、一つの枠にはめ込みたくないという思いがあったからです。

また、日本にいた時は、「楽しさ」、「喜び」という気持ちを考えたことはありませんでした。しかし、中国に行って中国語を学んでいると、楽しい、嬉しいという気持ちを中国では「開心」ということを知り、その気持ちとは何かを言葉から理解することができたのです。「心を開く」という気持ちを出していきながら、みんなと付き合うことが大事ではないでしょうか。

石川 人と接する時に確かに、自分はもちろん相手に対しても、民族やナショナルリティという観点から意識しがちです。それに対して矢野さんは、自分を役者として意識し、周りの人も、一人の大道具さん、一人のカメラマンといったように、一人ひとりを見ていたということですね。

質問 日本で日韓というバイカルチャーファミリーとして、2人の子供を育てるうえで難しかったこと、または変わって欲しいと思うことは何か、盧さんにお聞きしたいです。

盧 私自身は、結婚して嫁としてその家に入るということは、その家に骨を埋めるということの意味すると、両親等から言われてきました。なのに、結婚して夫の実家に行くとなんか

お客さん扱いをされたのです。お客さんではなく家族として接してもらうには私から近づいていくしかないと思い、「この前の料理はどうやって作るのですか」と質問をしたりと、毎日のように電話し親密になる努力をしました。

そして、家族の中での日韓といえば、日本で生まれ育った2人の子供はある意味日本人なのです。ですので、日韓のサッカー試合を見ていて興奮してどちらかの悪口を言うと、片方もカッとなって結局喧嘩になってしまうので、私はその場にはいないようにする等、できるだけそのような状況は避けようとしています。他の人との間での日韓だと、中学校、高校をハワイで過ごした子供たちが、ハワイで「日本人だ」と韓国人の留学生にいじめられたことがありましたが、韓国人である私にとって子供を育てる上で、そのことが一番きつかったかもしれせん。

最後に、日本のお母さんほど大変な、しんどい人はいないだろうと思います。例えば、韓国なら私のようにビジネスをやっている女性は、ベビーシッターを雇ったりします。しかし、日本では、家事手伝いを雇う人はそれほど多くないと思います。子供の教育や家事をお母さん任せではなく、例えば共働きをしている家庭であれば、旦那さんも家事を行ったり、子供の教育にも関心を持ったりと一緒に話し合いながら一緒に育てていくよう、少しずつ変えていくべきではないでしょうか。

質問 それぞれ国を離れて他国に行って気づいた母国のよさや、移住した国のよさには、どのようなものがありますか。

盧 日本の方は、相手に対する繊細な配慮がありますし、物事を丸く収めようと自分の感情を表現するのが下手なところがあると思います。対して韓国の方は、優しい言葉をかけるのを恥ずかしがるけど、自分の感情をストレートに表現し、人への気持ちや関心も直接示すので、韓国にいた時はそれを「おせっかいだな」と思っていました。日本での生活が長くなった今、韓国に帰ると、「人のことなのうるさいな、干渉が多いのだ」と思っていたまさにそのことから、「人の暖かさ」を感じます。

日中韓という三国の仲が悪くなったり、喧嘩したりするのも、互いに対して関心があるからではないでしょうか。なのに、相手に距離をおいて接しようとする繊細な配慮が逆に、「相手に関心が無すぎた」と思われてしまうところになるかもしれません。もう少し暖かさを直接伝えて欲しいとも思います。

矢野 確かに冷たいと見られるかもしれませんが、それは、日本人の、個人個人の空間を大事にしていることの表れではないでしょうか。その相手のことを考えているという気持ちも分かりやすく伝えるべきでしょうけど。

中国について言えば、中国のイメージは一言では言えないと思います。むしろ、私自身は、

自分の固定概念で締め付けないようにと、様々な可能性を秘めて、中国についてのイメージそのものを作らないようにしています。

彭 伝統音楽が専門なので、それと関連付けて韓国に来て発見した韓国のよさは、伝統を守りそれをベースにして新しいものを作り出していることだと思います。それは、伝統音楽をやっている中国人である私からしてうらやましい。

今広がっている韓流も、韓国の持っている特徴をうまく活用できているからだと思います。また、韓国は国際結婚や外国人が増え社会が多文化化していますが、国内ではその多様な文化を受け入れ、国外に向けては固有の文化をしっかりと出していく、こうしたこともすごいと感じています。中国には多様な文化と民族、そして歴史がありますが、まずはその特徴、特色が何かを把握することが大事ではないかと感じています。

結びにかえて

石川 今日の話から、文化とは、異文化の中にいるからこそ理解できるものといえるのではないのでしょうか。異文化だからこそ、そこには辛さだけでなく、楽しさや新しさがある。異文化の中にいるからこそ、自分の国の文化についても、相手の国についても、楽しさと難しさを感じることができる。このことが、今後の日中韓を考える上でのヒントになったのではないのでしょうか。

また、今日の話の中でもありましたように、日中韓が喧嘩したりするのも相手に関心があるから、ある意味仲が良いからかもしれません。だからこそ、今後さらに継続的に身近な付き合いをしていくことが必要でしょう。

大河原 日中韓という3国を理解するにはより深いところまで踏み込む必要がありますが、それぞれの役者、企業家、文化人という立場で異国である国に飛び込んで、様々な苦勞を乗り越えて活躍されている3人の話を伺いながら、その一端を垣間見ることができたのではないかと感じました。

石川 日中韓の首脳会談もなかなかできないなか、ポピュリズムや自国中心主義等世界情勢も混迷し、様々な課題を抱えています。日中韓三国が、こうした状況に巻き込まれずに未来に向けた関係を築いていくには、三国の絆とは何か、現在何があつて、何が足りないのかについて、もう一度じっくり考える時が来ていることを、この連続セミナー「“だから日中韓” 一絆の再発見」を通して確認できたのではないのでしょうか。